

◇園長室の窓から◇

保育を考える

松島 ち津

私は担任をしていない先生方が、ドッジボールや、巧技台の
枠ぐりなどで、子どもと一緒に遊んでいる様子を見る
と、その若さや活力に羨望の気持を抱いたりすることがある。

又「靴をへだてて痒きをかく」もどかしさの思いをすることも
あるが、情熱をこめて子どもと取り組んでいる先生方に朝夕接
していると、自分の若い頃が思い出されてくる。

或る日担任がお休みということになれば、補教という立場で
直接子どもに接する機会が出来る。こんな時は、これぞ好機到
来とばかり意気込んで子どもの部屋へ出かけて行く。

「センセイ、ドウシタノ？」

「センセイ、オヤスミ？」

(この私だって先生なのに、とひとり言は胸にしまって、な
るべくあっさり)

「〇〇先生は、今日風邪をひいておやすみよ」

「だから、今日は園長先生が〇組の先生よ」

とたんに、ガツカリしたような顔、顔。

「フウン」と不承不承。

「園長先生と遊んでくれる？」と私。

「イイヨ」(まあしょうがないやという顔)

こんな状態で一日が始まる。絶好のチャンスと意気込んで
見ても、よく考えて見れば休んだ先生には、担任としての週
の流れの計画がある筈、指導の意図がこわれる結果になってはと

考えると、(この一日、一人もけがをしないで遊ばせれば)と初めのハッスル振りは、どこへやらという始末となる。

さて、園の先生方と子どもとの生活を見て、私なりに考えていることをまとめて見た。

一、子どもの生活は遊びである

幼稚園の教育的な配慮のもとに設定された環境の中で、思い切り自分を出して遊ぶ子ども、なかには友だちの遊ぶ様子をジッと見ている子どももいる。そんな子どもでも、とにかく幼稚園に来る。門で迎える私に、目が合うと小さい声でオハヨウグザイマスと言いながら。登園した時点では、幼稚園に来ることに楽しみを持ち、この子どもなりの期待をもって来る。この期待に応える為に、保育に当る私達は、ひとりひとりが自分を発揮できるような場を考え、様々な工夫をする。今日は何をして遊ぼうか。〇〇くんは来ているかな? 遊びたい遊具が使えるかしら等と、遊ぶことを考えている子ども。幼稚園では遊ぶことが全部の生活であると言っても過言ではない。子どもからは遊ぶことを切り離せない。遊ぶ事が目的である。遊ぶ中で学びとっていくもの、それが子どもの身につけて、積み重ねられ、

その子どもを造り上げていく。だからこそ、自分で遊べる子どもになって欲しいのである。

二、遊びの成り立ち

子どもが遊ぶ事を見つけて遊び始める時、先ず興味をもち、やって見たい、やって見ようとなる。やって見たいと思ひ、自分にとって新鮮な事には、好奇心や探求心が湧く、やっている過程で面白くなり、気づいたりして更に興味が深くなり、いつまでも続いて、繰り返して遊ぶ。気づいたり発見したりするとは学習である。

或る日の子どもの活動から拾ってみた。

。四歳児の部屋の中で

十月の此の頃、年少児もダンボールの空箱を使い始めた。

M君がみかんの空箱を相手にしきりに動いている。始めは先ず箱の中に入ってしゃがんでみる。次に仰向きになってスッポリ入ってしまう。まるでお風呂に入っている様である。

「お風呂みたいネ」と声をかけたが、返事はしない。暫らく入っていたが、箱から出ると、箱を逆さまにして、頭からか

ぶつてみる。しゃがんで体を全部入れようとする。頭と手は入るが足が出てしまう。足から入れると手が出る。そこで箱を横に向けて、体を入れ、そのまま箱ごとゴロリと向きを替えようとしますが、ちょっとのことで、はみ出てしまう。はみ出たところで箱は被ったまま床とのすき間から外の様子を眺める。可愛いやらおかしいやら危く吹き出しそうになってしまう。本人は至極真面目で、そのままカタツムリのようにゴソゴソその辺を這い廻ると、少々疲れたらしく、突然立ち上って手足を延して終り。

終始見ていた私は、全く感心して了った。ダンボールの空箱を相手に約十五分間、この子どもなりに、体を動かし、自分の思う方向に到達しようためし、工夫し、ひたすら学習の態度である。たまたま取り組んだ、ダンボールという素材は、子どもの無限の可能性をうけとめ、意欲を促し、創造性を高めるのに適切であったことも、遊びを引き出す媒介となつて生きたと言えよう。

このように、能力や、発達の段階の違いや、イメージによつて、変化する可能性のある素材であることが、期待に応えて遊びを引き出す為に必要であると思う。此の場合は全くのひとり遊びで終った。

。二人の遊びの例

ホールをいっぱい遊園地ごっこが展開されている。巧技台も大型積木もマットも総動員、フト見ると、S君とO君と二人がコーナーで何か二人だけで始めている。大型積木の立方体を二個並べて長方体になっている。一方の端にO君がもう一個つなく、S君は三角を置いた。これで三個繋いだ右端は斜面となった。O君は左端から上つてトントンと上を歩いて右端まで来た。足が滑って尻もちをつきそうになり、ツルリと滑ってストンと床に落ちた拍子にキャットとよるこぶ。足が滑った時はちょっとびっくりした様子だったけれど滑り台のようにお尻が滑ったので、面白くなった。一つの発見である。見ていたS君は、自分もトントンと渡つて来て、わざと落ちる真似をして、ツルリと滑つて、床にドシン、キャット、「コンド、ボク」O君は、持って来た三角一個を左端に置くと、「トントントン」と弾みをつけて歩いて来ると、「ストーン」「ドシン」「キャット」「ハッハッハッ」もう面白くてたまらない様子。

一辺が四五cmの積木の斜面だから、するつと滑つてもすぐ、ストン、ドシンなのだが、このリズムを発見した面白さ、自分から面白がつているこの二人。遊びそのものは単純でも

トントントン ストン ドシン キャッ このリズムを生み出した。見事に遊びをつくり出し、面白くし、自分達で楽しい雰囲気を作り上げているわけである。子どもは立派な演出家であると心から感じた。

この場合、このように面白く遊びにのることが出来たのは、S君、O君の二人の人間関係が、ピッタリと安定していることが基になっている。

この二つの例は、前者の遊びは、全くの一人遊びが、素材の適切さで、面白さが深まり、遊びがつくられていった例で、後者は、人と人との関係の安定さが、遊びを成立させた例である、どちらにも保育者は子どもの前には居ない。背後に在って、適切な素材をさりげなく出すことによって、又友だちの結び付きを育てることによって、指導者としての役割りを果たしていたと言えるよう。

三、幼児の教育は

子どもは、おとなになる為に幼児期があるのではない。子どもは、子どもそのものであって、此の社会の中の一員であり、一人の人格を持った人間であると考える。永い人生の一時期

を、四歳児は四歳児なりに、五歳児なら五歳児として、かけがえのないその時を、最高に充実した、最高に楽しい生活を過ごすことであると先ず考えたい。

ならば、幼児の教育は何をするのか、それはおとなが、自分に都合の良い子どもの将来の姿を予想して、型をきめ、無理にはめ込むような教育ではない。毎日の子どもの生活を大切にするならば、子どもが持っている様々の能力を遊びの中でいかし、遊びをもっともっと面白く、楽しくする方向に伸すことであると思う。面白く楽しくは、ただおもしろおかしい事ではなく、友だちと触れ合う中で、前記にあるような遊び方のくふうや、新しいルールを生み出し、次から次へと発展していく、子どもなりの自主性や、創造性がその中で発揮できるような遊びを展開する事を望みたい。廻りから、サア遊びなさいと遊ばされるのではなく、自分から遊べる子どもであり遊びの中に没頭する子どもであること。

特にひとり遊びから始まる幼児の遊びを、友だちと居る楽しさ、友だちと共に喜ぶ共感の気持や、助け合う心情、役割りを分担して遊ぶ事から、友だち意識や、連帯意識を育てたいし、又育てなければならぬと思う。

このことは、前にも書いたように、一人の人間として、認め

られることであり、将来自分の生活を創造し、ひいては次の時代をつくり上げる事につながると思うのである。

四、保育者としては

。信頼をもつ

「先生、今頃何してるかな」

私の尊敬する先生のお嬢さんが、日曜日の一家団らんの夕食の席で思わず口にした言葉、もう中学生なのだけれど。

父上である先生は、つくづくと次のように言われた。「僕は、受持ちの先生の立派さが本当にわかった、こんな先生に教育を受ける娘は幸だ。教育に当るものは皆、このような先生であって欲しい」と。

幼稚園でも同じような事があつた。

受持ちのおかあさんからこんな事を言われましたと、或る時担任から聞いた話は、

「先生と結婚する、と言いき張って、七五三のお祝いの服を出してと聞かないんですよ」と。

可愛いと思うと同時に、ここまでの信頼関係を得ている先生という存在にまたまた感じ入ってしまった。子どもは先生

に絶対の信頼を抱いている。子どもにとって先生は、人的環境の中の一つであるなどという以前の関係であると考えなければならぬ。

どうしてかな、という関心や、疑問を持つ事は、思考力を深め、経験の幅を拡げることになる。子どもの前だからと言って、格好をつけずに、「どうしてかしら」とわからない様子を見せ、後で考えたり、工夫したり、試したりする姿を見せる、と言う先生もある。

これは、問題意識を持つように仕向ける一つの手だてとしてだけでなく、もう一つの考え方の「先生もわからない事がある」だから僕達と一緒にやってみるんだナ、同じなんだ、という親近感や一体感を持つようになる。そして子どもとの人間関係が又しつかり結ばれる、と此の様に考えたい。

。子どもの期待に応える

子どもが先生に対して、絶対無二の対象と感ずるのは、

おもしろいことをさせてくれる

遊んでくれる

親切

やさしい

いろいろ教えてくれる

助けてくれる

何をして上手である

叱るけれど 好き、等等

というように子どもなりに先生に期待しているかけがえのない人なのである。教師自身、子どもの声を、話を聞いてこれに応えなければならぬ。応え方はいろいろあるだろう。相手の子どもによっても違うし、時と場合による事勿論である。

言葉で答える

目だけで答える

子どもと同じ状態になる

肩に触れたり、手を握ってあげたり、体で応える。

同じ気持ちになる事も応える一つであろう。例えば、怪我をした時「痛かったのネ、先生もけがした事あるのよ、痛くて泣いちゃったの」等と言うと、子どもは、先生も泣く事あるのかと思いい体感を持って安心する。

。もう一つ、是非教師として心がけてほしいのは父母との関係である。

父母への理解や信頼の為には常に連絡を密にする事は勿論であるが、教師側の意識としてどうあるべきか。教師の目は常にひたすら子どもに向いていなければならない。その子どもとの背景に父母がいると思う事である。つまり保育者と子どもとの線上に父母がある、線から外れて父母がいるのではない、線上にあればまぎれもなく、保育者そのものすべてが、子どもに向っている。線から外れた見方をすれば、子どもに向うべき心も目もその分だけマイナスになるのだから。

画家はカンバスに自分を表現する。

我々教育者は、子どもに教師自身を染めていく、

そこに信頼関係がなくて、何があるのか。

終りに、

保育というこの道

無限の可能性を持つ、この子ども達と

共にあることに、よろこびを持って、ひたすら進みたいと思ふ。
(東京・文京区立後楽幼稚園)